

平成30年度 ウォッゼ島戦没者遺骨調査派遣報告



ウォッゼ島遺骨調査、マジュロでの報告会。大酋長（前列左から2人目）と、地権者の皆様、公共事業大臣、大使館スタッフ、派遣メンバー

1月4日から16日までの13日間、戦没者遺骨調査のためマーシャル諸島ウォッゼ島に行ってきました。現地到着まで3日を要するため、実際の調査日数は6日間でした。

メンバーは、一般社団法人日本戦没者遺骨収集推進協会の専務理事・事務局長、竹之下和雄氏（昭和48年、東海大学の船でウォッゼの遺骨収容に携わった方）、同会の白方勝彦氏（祖父がロイ・ナムルで戦死）、日本遺族会から岡村勝利氏（父がウォッゼで戦死）、J YMA日本青年遺骨収集団から私、鈴木千春（大叔父がウォッゼで戦死）の4名です。

楽園のような美しい珊瑚礁の島。しかし、73年前のウォッゼは壮絶な飢餓の島でした。

マキン、タラワの日本軍玉砕後、次なる米軍上陸の矛先は最前線のウォッゼでしたが、強固な戦車防壁があるため、防御の薄いクエゼリンになりました。

昭和19年2月、第六根拠地隊司令部があったクエゼリン守備隊が玉砕。それ以降、ウォッゼは一切の補給を絶たれ孤立し、兵士は次々に餓死していきました。ミッドウェイ海戦後、敵潜水艦が活発に遊弋し、輸送船の被害が急増したのも孤立の要因のひとつです。一機一艦の支援なく、連日、敵機の爆撃を受け、航空機も食糧庫も何かも破壊されたウォッ



アイランドホッピングでマーシャルへ

鈴木 千春

株式会社ぶれす所属

ぜ。食糧はすぐに底を尽きました。

ウォッゼの戦没（餓死）者数は、厚労省発表では2900名。そのうち208柱の遺骨を昭和40年代に政府派遣団が収容しています。今回の派遣は45年ぶりとなり、地中に眠る2700名の調査が目的でした。

調査派遣に至るまで

マジュロから約300キロ離れたウォッゼ島の芝生の滑走路に着陸した瞬間に胸にこみ上げるものがありました。

私は以前、沖縄や硫黄島で遺骨収容を経験しましたが、どうにかして大叔父の戦没地、ウォッゼでの遺骨収容ができないものかと長年願い、関係省庁に働きかけていました。多くの方々のご尽力で、念願が叶い、現地調査に参加することができました。

在マーシャル日本国大使館の岩田哲弥領事、そしてウォッゼ出身で祖父が日本人というオタ・キシノ市長（マジュロ在住）、この2人のキーマンがいなければ、未来永劫ウォッゼに調査に行くことはできなかつたと思います。

遺骨収容は厚労省の管轄であり、現在、厚労省から日本戦没者遺骨収集推進協会に委託されています。まずはウォッゼを調査対象にしてもらわなければ何も始まりません。

当然ながら、厚労省は「日本人戦没者の骨がある」という正確な現地情報がなければ動けません。かつて、ウォッゼにはJICA職員が1名派遣されていましたが現在、日本人は住んでいません。私自身も行ったことがなく、現地の遺骨に関して、なんの手がかりもありませんでした。

ないない尽くしの中、一縷の望みをかけ、自分が10年以上コツコツ集めた日米双方の戦史記録や、生存者の手記、昔の遺族会会報等から、当時の戦没（餓死）者の「遺体埋葬場所」を探し求め、少しでも有力な情報があれば、その都度、厚労省、推進協会、現地大使館の岩田領事に情報を送り続けました。

7月、岩田領事が直接、現地視察に行かれ、遺骨を見つけ、厚労省に連絡していただいたことで、調査派遣が大きく前進しました。



大使館表敬訪問（右から、岡村氏、岩田哲弥領事、白方氏、竹之下団長、齋藤法雄全権大使、鈴木、渡邊博参事官）



歴史保存局に表敬訪問（左から2人目が同行した考古学者スザン・アンダーブリンク博士）

また、オタ市長は昨年5月、ヒルダ・ハイネ大統領に同行し「太平洋・島サミット（太平洋島嶼国首脳会議）」に出席、安倍総理大臣と会談されました。市長は、マーシャル諸島の戦没者遺骨の現状を説明され、その際、安倍総理は市長の目をじっと見つめ、全ての説明を丁寧に傾きながら聞いた後、「日本国にとって戦没者遺骨収容・帰還は重要課題のひとつである。戦後、既に73年経過してしまった中、戦没者を直接知る親族が御存命中に、何とか遺族のもとに遺骨を帰還させたいと考えている。それを集中・加速させるため戦没者遺骨収集推進法を成立させ、政府として力を入れている。この事業は、二国（日・マ）間の協力関係・友好関係なしにはできない。より一層の協力のお願いと、更に二国間の様々な分野における関係促進・強化をしていきましょう」とのお話をされたそうです。

ウォッゼ派遣を願っていた私にとって、安倍総理との言葉は、最高最強の援護射撃でしたので、とてもありがたかったです。

後日、ウォッゼ決定の連絡が届きました。とても大きな第一歩でした。



ウォッゼ出身で祖父が日本人というオタ・キシノ市長

離島の複雑な土地制度

ウォッゼの土地制度は特殊で、島内は35の区画に分かれ、一つの区画に4名の地権者がいます。島の最大面積の地権者が、大酋長（イロージラプラブ）で、その下に（区画ごとに）イロージ、アラップ、リジャルバルという地権者がいて、4層構造を成しているため、人数が多いのです。全員の了承がなければ試掘はもちろん、エリアに入ることも許されません。マーシャルには国有地ではなく、すべてが私有地。日本では考えられないシステムの国でした。

そこで、オタ市長のご尽力があり、岩田領事とともに事前に、地権者に根回しをして、私たちと地権者を結ぶ「説明会」を各所で開催してくれました。私たちは行く先々で調査の説明をし、お土産のお菓子を手渡して誠心誠意、理解と協力を求めました。

45年ぶりですから、お互い「はじめて」です。初対面のお相手の庭先を調査させていただくことになる



アラップへの説明会

ので、何事も細心の注意を払い、丁寧に順番を間違えずに、話を進めなくてはいけません。

地権者ははじめ、少し警戒している様子でしたが、オタ市長のリーダーシップと、岩田領事の細やかなコーディネイト、離島の事情通である通訳・橋本岳氏の流暢なマーシャル語、すべてに助けられ、全員のご賛同をいたくことができました。ほかの案件では、反対意見がでて揉めることが多いなか、奇跡のことでした。派遣メンバー全員が、ウォッゼに深い縁があることを知ったアラップの一人からは、「家族の遺骨を国に帰したいと思う気持ちは、マーシャル人も日本人も一緒にあります、100%協力したい」という心強いコメントもいただき、感涙しました。



ご賛同いただき、記念写真



島の15か所を調査

トラックに乗り島内を巡ると、あちこちから情報が届きました。20年前のものから、数ヶ月前の発見情報まで、複数寄せられました。早速、現地の若者たちの協力で、現場を掘ると、ここでは大腿骨、ここでは肩甲骨と次々発見されました。

私たちはGPSで発見場所を記録し、次の回の遺骨収容団のためにマーキングをしていきます。同行した歴史保存局の考古学者の米国人女性は、「遺骨からある程度の年齢がわかるので『なんて若い！ 彼は25歳以下だわ』と遺骨を手に、呟いていました。大叔父はまさに25歳でしたので、その言葉にドキッとした」。



島内に残る戦争の傷跡

73年前、島に刻まれた凄惨な歴史を想像しながら搜索しました。深い草むら、砲台のそば、砂浜、行く先々に骨片があり、若い兵士が、食べる物なくフラフラとさまよったであろう島の隅々に、彼らの「無念」がしみ込み、骨片は「俺はここにいるぞ」と叫んでいたようです。彼らはどれほど日本に帰りたかったことだろう、遠く故郷の家族を思い、母の白いご飯をお腹いっぱい食べたかったんだろう・・・。私は大叔父に、故郷・花巻のお水とお米、お菓子を供えました。

この南海の果てで、力尽きた将兵の悔しさ、悲しみの声が、草深く湿った地中から聞こえるようでした。

私は、帰りの時間が近づくほど、焦りがでて、「お願いだから地中から光って、私たちに居場所を教えて欲しい」と、心の中で叫んでいました。

2月に収容派遣

年間平均気温30度で高温多湿。何もしなくても汗が吹き出します。昨年の日本の夏も酷暑でしたが、加えて紫外線が日本の13倍もあります。高い湿度と照り付ける日差し、時折リスコールに襲われ、体力を奪われます。私たちの宿泊所のエアコンも4部屋中、3部屋故障して



次回収容団のため発見場所に目印をつける



証言のあった場所を捜索

いましたので、体力的にも厳しい6日間でした。

反面、雑草には快適な環境なので、あっという間に成長します。今回、一所懸命伐採した箇所は、今頃はうっそうとした草むらに戻っていることでしょう。米軍から大量の爆弾が投下され、この島に残ったヤシの木はたった一本だったそうです。その時であれば、遺骨は発見しやすかったはずですが、73年が経過した今ではジャンク化しているのでかなり困難です。



島内どこも深い雑草地

残る2700の英靈をお迎えするにはまだ時間がかかります。しかし、やっとウォッゼでの「第一の扉」が開かれました。何年かかっても、お迎えにいかねばなりません。

遺骨袋を胸に抱えたとき、ウォッゼに行きたくても行けなかった遺族（母、妻、兄弟・姉妹）の心痛が、昔の遺族会会報に書かれていたことを思い出しました。私は今、その方々の代理でウォッゼにいる、長い年月が過ぎてしまったが、母たちを代表してここに来たのだという自覚を持ちました。

最終日、空には大きな虹が二重にかかりました。英靈からのメッセージをもらった気がしました。

今回は「調査」のため、遺骨を動かせませんが、2月の収容派遣で日本にお連れできる予定です。

戦没者遺骨収集推進法は2024年までの期限立法。国の命令でこの地に来た兵士たちは、地中で待ち続けています。引き続き、地権者との友好関係を維持し、決して頓挫することなく、全ての英靈に日本にお帰りいただけるよう、國の責務として、収容派遣が長く続くことを強く祈念いたします。

ウォッゼは地理的に遠く、環境的に厳しく、時間や約束に関して、大らか過ぎる国民性など、日本とは全く違うため、戸惑うことも多くありました。しかし目的は一つ、「英靈の遺骨を日本に帰す」こと。

準備期間から献身的に私たちをサポートして下さった岩田領事は、「外交官の鑑」でした。ここに至るまで、いくつもの問題が発生しました。その都度、忍耐強く調整し、一つずつクリアし、私たちの環境を整え、調査がスムーズに進むよう、完璧なコーディネイトをしてくださいました。最大の恩人です。

そして、安倍総理との約束通り、力を尽くして下さったオタ市長、完璧なマーシャル語で交渉して下さった通訳・橋本氏、生活面では現地ガイドとして（マジュロで輸入ショップを経営する）M J C C 佐藤氏の行き届いた



3人の恩人。右から岩田哲弥領事
M J C C 佐藤恒介氏、通訳・橋本岳氏。

サポートに助けられ、調査ができました。

また、齋藤法雄全権大使をはじめ、在マーシャル日本国大使館の皆様には、準備段階から多大なるご協力をいただきました。

さらに遡れば、戦史史料の検索中、情報を下さった方、貴重な史料をご提供いただいた方、米軍史料を訳し、分析してくださった方、現地の情報収集に協力いただいた方、本当にたくさんの方に助けていただきました。

お力添えをいただいたすべての皆様に、深く、深く、感謝を申し上げます。

※3月7日（木）10時30分より、千鳥ヶ淵戦没者墓苑において、遺骨引渡式が実施されます。

（本文はマーシャル方面遺族会会報記事に加筆しました）



調査最終日に現れた虹



プロペラの広場に祭壇を作り、全員で参拝